

認知症 あれこれソレ!

精神科認定看護師が認知症のいろいろお伝えします。

珠洲市・木ノ浦海岸

精神科認定看護師(老年期精神看護領域) 藪 一明

現

在の日本、4人に1人が65歳以上の高齢者で、その高齢者のさらに4人に1人が認知症とその予備軍という困った状態になっています。

当院は精神科という特性上、症状の進んだ状態や、困った症状の認知症患者さんを受け入れることが多いのですが、私が認知症の方々と関わりはじめた20年以上も前の状況と比べると、認知症の方々の様子や患者さんを取り巻く状況も随分と変わってきました。

患者さんが生まれ育った背景で見ますと、以前は明治生まれの方が沢山いらっしゃいましたが、最近では昭和のはじめ頃の方が中心です。

明治～大正初め生まれの方々は、青春時代を自由で伸び伸びとした環境でお育ちになったせいか、心の底が明るい方が多く、「教育勅語」はソラで言うことができますし、子供の頃や青春時代に唄ったであろう「桜井の決別」、「籠の鳥」などという唄をみんなが声を揃えて唄うことができました。音楽というのは不思議なもので、認知症が進み、話す言葉が失われた状態でも、歌なら一緒に歌うことができたりします。若い頃のいきいきとした感情が甦り、楽しい時間、或いは苦労した体験であっても、それを共有することで、戸惑いの多い現在という時間においても、自分が生きる場所や意義を見だし随分と落ち着かれ、お世話をする私たちも救われる思いを何度も体験致しました。

一方、最近入院していらっしゃる大正末～昭和の初め頃に生まれ育った方々にとっての青春時代は、戦争によって自由な気風は失われ、言いたいことも言えず、ただ堪え忍ぶことでしか生き延びることができなかった時代でした。自分のやりたいことを我慢し、とにかく目の前に与えられた仕事を、ただ一生懸命にこなすことに精力を傾けて過ごし、自分の「心」を遊ばせることが苦手な方々のように思えます。その大切な役割をこなす能力が失われてからでも、その役割を一生懸命に果たそうとする姿が、我々から見ると認知症の困った症状と言えるでしょう。

そのような方達が身近にいて、どう接して良いかわからない方はまず、アルバムと一緒に開いてみることをオススメします。認知症という脳の病気は、一般的に新しい記憶から失われていきますが、古い記憶は鮮明に残っています。写真と共にいきいきと生活していた頃の記憶が甦って、若い私たちが知らなかった時代のことをいきいきと話し始めるかもしれません。その話をきちんと聞いてさしあげることから何か生まれます。

アルバムが無いという場合は、その頃その方が体験したであろう出来事を調べて、尋ねてみるのも良いかと思えます。最近私が体験したことでは自衛隊のF104ジェット戦闘機が金沢市内に墜落した事件(昭和44年)や今の金沢市入江・新神田あたりにあった旧金沢競馬場にサーカスが来ていた話(昭和40年代?)で、日頃は目を閉じて何もしゃべらない方が、大きく目を見開いて沢山喋ってくださいました。明治生まれの方でしたら「浅の川」で泳いだ話や「粟崎遊園」、「四高生」に胸をときめかせた話だったんですけどね…(笑)わからない方は、まず身近なお年寄りに聞いてみてください。